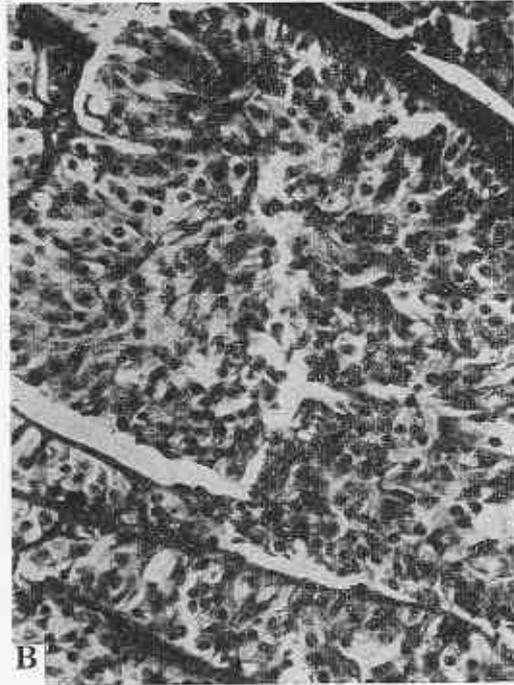
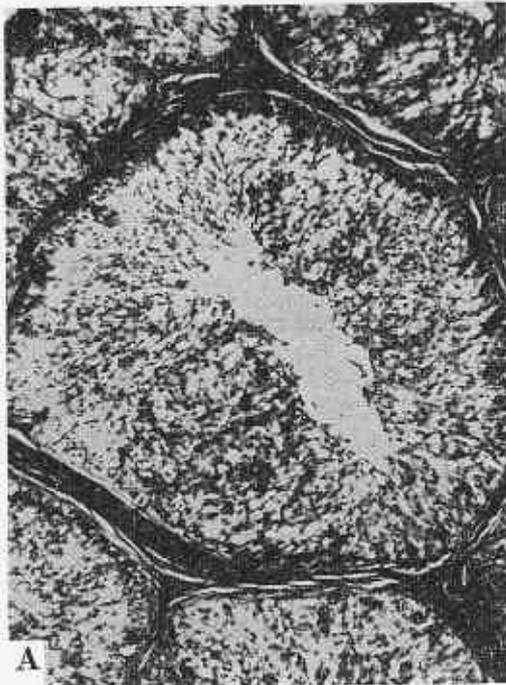


犬のセルトリ細胞性精巢（辜丸）腫瘍

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題・第7回獣医病理学研修会標本 No.95



犬，雑種，雄，15才，鹿児島市産

精巢（辜丸）が著しく腫大してきたので本学家畜病院に治療を乞うたものである。病院では辜丸腫瘍と診断し、手術により辜丸の全摘出を行なった。摘出された辜丸は大人拳を縦に二つ重ねた大きさで、陰囊皮膚は所々欠損し、一部には黄色の実質が現れている。陰囊皮下は白膜におおわれ結節状腫瘤からなり、凹凸が著明である。腫瘤は少々硬く断面は黄色を呈し、灰白色の条紋が縞をなし、出血壊死部もみられる。精巢上体（副辜丸）は見当らない。一側の辜丸及び副辜丸は合せて拇指大で萎縮頭著で且つ甚だ硬い。犬は手術後学校にて貰い飼養していたが、術後45日目不慮の事故により安楽死させたものである。剖検するに辜丸摘出部位は治癒している。内部所見で内腸骨リンパ節は鳩卵大に腫大し、それに沿って骨盤腔内に小児拳大の腫瘍が認められ、何れも表面、剖面共に黄灰色を呈し、柔軟で剖面に出血、壊死、嚢胞形成も見られる。又肺には灰白色で少々柔い小豆大～蚕豆大の結節が多数認められ、剖面も同様で周囲の境界は明瞭である。内腸骨リンパ節、骨盤腔内腫瘍、肺の結節は何れも一見して腫瘍と診断出来る。その他の臓器は肝、脾の萎縮以外特に異常を認めない。同一個体内に異なった腫瘍が同時に発生することはあるが珍らしいので、先に摘出した辜丸腫瘍と内部臓器に見られた腫瘍は同一のものか、又異なるものか何れにしても極めて興味をもたれた。

写真は摘出辜丸の組織像の弱拡大(A)、強拡大(B)である。像は腫瘍性変化を示している。即ち明瞭な胞巣状構造を呈し、胞巣の境界は比較的僅小な間質により境されている。胞巣は長円形、紡錘形乃至円柱形の腫瘍細胞よりなっている。腫瘍細胞は大部分緻密で充実性の胞巣を形成し、胞巣辺縁の細胞は甚だ多層で不整乍らも各細胞は胞巣中心に向つて縦に放線状に排列し、中心には空隙が見られるが、精子形成は全く認められない(写真A)。原形質は淡染し、所々円形空隙が見られ、核は円形、楕円形、或は紡錘形でクロマチン量は一般に中等量で網状或は顆粒状で核小体は1～2コ明瞭に見えるものが多い(写真B)、本組織像は円柱上皮性細胞よりなれる瘍腫と認められよう。扱辜丸腫瘍にはセルトリ細胞に由来するセルトリ細胞腫、精上皮細胞に由来する精細胞腫(セミノーマ)、間細胞(ライディヒ細胞)に由来する間細胞腫の三種が知られているが、本例の腫瘍細胞はセルトリ細胞にもつとも酷似するのでセルトリ細胞性辜丸腫と診断されよう。内腸骨リンパ節、骨盤腔内及び肺の腫瘍の組織像は何れもセルトリ細胞性腫瘍である。よつて辜丸のセルトリ細胞腫瘍が原発で肺、内腸骨リンパ節等の腫瘍はその転移である。

辜丸腫瘍は屢々見られる腫瘍ではない。又一般に辜丸腫は他の臓器に転移することは稀で本例の如く内臓に見事に転移した例は珍らしい。転移の方法としてリンパ道性が主であろうが、肺の転移は血行性も考えられる。